

大豆

1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
紫斑病	—	やや多	(1) 前年の発生量は、平年よりやや多かった。(+) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり特に発生を助長する条件ではない。(±)
マメシクイガ	—	並	(1) 前年の発生量は、平年並だった。(±)
吸実性カメムシ類	—	並	(1) 前年の発生圃場率は、平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

2 防除のポイント（各病害虫のおおよその防除適期は下図を参照のこと）

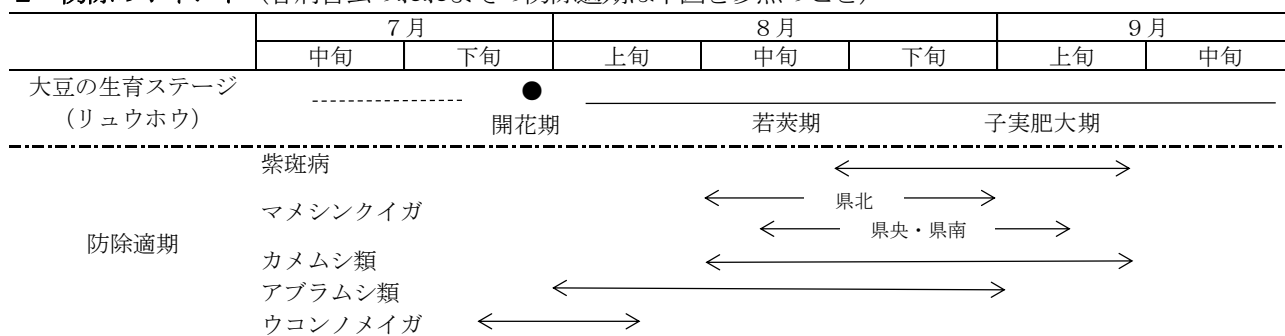


図 大豆病害虫の防除適期（平年の場合）

【紫斑病】

- (1) 若莢期（開花後20日頃）～子実肥大期（開花後40日頃）に1～2回、薬剤防除を実施する。
- (2) マメシクイガと同時に防除を行う場合は、マメシクイガの防除時期に合わせる。

【マメシクイガ】

- (1) 連作年数が長いほど、被害の発生リスクが高い。
- (2) 薬剤が莢によく付着するように散布する。
- (3) 薬剤によって最も効果の得られる防除時期は異なるので、表1を参照する。なお、吸実性カメムシ類と同時に防除を行う場合には、有機リン剤か合成ピレスロイド剤を選択する。

表1 マメシクイガの防除時期

薬剤	防除時期	
	県北	県央・県南
有機リン剤	8月第6半旬	9月第1半旬
合成ピレスロイド剤	8月第5半旬	8月第6半旬
ジアミド剤	8月第3～5半旬	8月第4～6半旬

【吸実性カメムシ類】

- (1) 開花後期～子実肥大中期に1～2回、薬剤防除を実施する。

【アブラムシ類】

- (1) 多発すると早期落葉や、ウイルス病媒介による褐斑粒が発生する恐れがある。したがって圃場をよく観察し、増加傾向が認められたら防除を行う。この際、薬剤が葉裏にも十分付着するように注意する。

【ウコンノメイガ】

- (1) 生育量が大きい過繁茂圃場や、葉色の濃い圃場において多発する傾向にある。
- (2) 7月第6半旬に茎当たり葉巻数が3個以上確認された場合は、8月5日頃までに薬剤防除を実施する。
- (3) 終齢幼虫には薬剤の防除効果が低下するため、防除時期が遅れないように注意する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止対策を徹底する。

- (2) QoI 及びDMI 殺菌剤は、耐性菌発生リスクが高いため連用を避け、2～3年に1回の使用に留める。
- (3) 無人マルチローター(ドローン)による大豆の紫斑病やマメシンクイガ防除では、茎葉内部への薬剤の付着が劣るため、十分な効果が期待できない。